

資料集

【資料1】日本共産党綱領から——未来社会論

「日本の社会発展の次の段階では、資本主義を乗り越え、社会主義・共産主義の社会への前進をはかる社会主義的変革が、課題となる。これまでの世界では、資本主義時代の高度な経済的・社会的な達成を踏まえて、社会主義的変革に本格的に取り組んだ経験はなかった。発達した資本主義の国での社会主義・共産主義への前進をめざす取り組みは、21世紀の新しい世界史的な課題である。

社会主義的変革の中心は、主要な生産手段の所有・管理・運営を社会の手に移す生産手段の社会化である。社会化の対象となるのは生産手段だけで、生活手段については、この社会の発展のあらゆる段階を通じて、私有財産が保障される。

生産手段の社会化は、人間による人間の搾取を廃止し、すべての人間の生活を向上させ、社会から貧困をなくすとともに、労働時間の抜本的な短縮を可能にし、社会のすべての構成員の人間の発達を保障する土台をつくりだす。

生産手段の社会化は、生産と経済の推進力を資本の利潤追求から社会および社会の構成員の物質的・精神的な生活の発展に移し、経済の計画的な運営によって、くりかえしの不況を取り除き、環境破壊や社会的格差の拡大などへの有効な規制を可能にする。

生産手段の社会化は、経済を利潤第一主義の狭い枠組みから解放することによって、人間社会を支える物質的生産力の新たな飛躍的な発展の条件をつくりだす。」（第5章「社会主義・共産主義の社会をめざして」）

【資料2】個人的所有の再建（『資本論』第1部第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」から）

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、それゆえ資本主義的な私的所有は、自分の労働にもとづく個人的な私的所有の最初の否定である。しかし、資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生みだす。これは否定の否定である。この否定は、私的所有を再建するわけではないが、しかし、資本主義時代の成果——すなわち、協業と、土地の共有ならびに労働そのものによって生産された生産手段の共有——を基礎とする個人的所有を再建する。」

（社研監訳『資本論』新日本出版社、新書版④1306ページ、上製版I b1301ページ）

【資料3】小経営—資本主義—社会主義・共産主義の3つの生産様式の比較

	生産手段	生産物（生活手段）
小経営	生産者個人による私的所有 〔生産者による私的所有（「自分の労働にもとづく個人的な私的所有」）の否定〕	生産者による個人的所有
資本主義	非生産者（＝資本家）による私的所有 〔資本家による私的所有（「他人の労働の搾取にもとづく資本主義的私的所有」）の否定〕	生産者（＝労働者）の個人的所有の否定
社会主義	「結合した生産者」による社会的所有	生産者による個人的所有の再建

（『「資本論」全三部を読む』第3冊、258ページ、参照。同書の表を一部改変）

【資料4】『反デューリング論』でのエンゲルスの反論

「収奪者の収奪によってつくりだされる状態は、つまり、個人的所有の再建であるが、しかし、土地および労働そのものによって生産された生産手段の社会的所有を基礎としての再建である、と言われているのである。これは、ドイツ語のわかる人ならだれにとっても、《社会的所有》というのは、土地とその他の生産手段とに拡がっており、《個人的所有》というのは、生産物すなわち消費対象に及んでいる、という意味である。」

（エンゲルス『反デューリング論』古典選書版、上、187ページ）

【資料5】自由な人々の連合体——『資本論』商品論でのマルクスの未来社会論

「最後に、目先を変えるために、共同的生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に1つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体〔アソツィアツィオン〕を考えてみよう。ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現されるが、ただし、個人的にではなく社会的に、である。ロビンソンのすべての生産物は、もっぱら彼自身の生産物であり、それゆえまた、直接的に彼にとっての使用対象であった。この連合体の総生産物は1つの社会的生産物である。この生産物の一部分は、ふたたび生産手段として役立つ。この部分は依然として社会的なものである。しかし、もう1つの部分は、生活手段として、連合体の成員によって消費される。この部分は、だから、彼らの中で分配されなければならない。」（『資本論』新書版①133 ページ、上製版 I a 133 ページ）

【資料6】『共産党宣言』での社会変革の目標の定式化

「共産主義の特徴は、所有一般の廃止でなくて、ブルジョア的所有の廃止である。

しかし、近代的なブルジョア的私的所有は、階級対立に、他人による人の搾取にもとづいた、生産物の生産及び取得の、最後の、かつもっとも完成した表現である。

この意味で、共産主義者は、自分の理論を一つの表現で総括することができる——私的所有の廃止。」

（マルクス、エンゲルス『共産党宣言／共産主義の諸原理』古典選書版、73 ページ）

【資料7】“インタナショナルは個人財産の廃止をめざす団体だ。”というマツィーニの非難への反論

「インタナショナルは、個々人に彼の労働の果実を保障する個人的な財産を廃止する意図はなく、反対にそれを確立しようと意図しているのである。現在、大衆の労働の成果は、少数者のふところに入っており、そしてこの資本主義的生産制度こそ、マツィーニが手に触れないでおこうと提案しているのであり、またインタナショナルが破壊しようとしているものなのである。インタナショナルは、だれもが彼または彼女の労働の生産物を取得することを望んでいる。」（エンゲルス「国際労働者総評議会での演説」1871年7月、全集第17巻、615 ページ）

【資料8】『共産党宣言』から

「階級および階級対立をもつ古いブルジョア的社会の代わりに、各人の自由な発展が、万人の自由な発展のための条件である連合体〔アソツィアツィオン〕が現われる。」

（マルクス、エンゲルス『共産党宣言／共産主義の諸原理』古典選書版、86 ページ）

【資料9】「機械と大工業」から

「工場法の教育条項は、全体として貧弱にみえるとはいえ、初等教育を労働の強制的条件として宣言している。その成果はまず、教育および体育を筋肉労働と結合することの可能性、したがってまた、筋肉労働を教育および体育と結合する可能性を証明した。……

……ロバート・オウエンを詳しく研究すれば分かるように、工場制度から未来の教育の萌芽が芽ばえたのであり、この未来の教育は、社会的生産を増大させる一方法としてだけでなく、全面的に発達した人間を作るための唯一の方法として、一定の年齢以上のすべての児童にたいして、生産的労働を知育および体育と結びつけるであろう。」

（『資本論』新書版③831～832 ページ、上製版 I b 828～829 ページ）

【資料10】労働と人間の能力の発展

「労働は、まず第1に、人間と自然とのあいだの一過程、すなわち人間が自然とのその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である。人間は自然素材そのものに1つの自然力として相対する。彼は、自然素材を自分自身の生活のために使用しうる形態で取得するために、自分の肉体に属している自然諸力、腕や足、頭や手を運動させる。人間は、この運動によって、自分の外部の自然に働きかけて、それを変化させることにより、同時に自分自身の自然を変化させる。彼は、自分自身の自然のうちに眠っている潜勢諸力を発展させ、その諸力の働きを自分自身の統御に服させる。」（『資本論』新書版②304 ページ、上製版 I a 304 ページ）

【資料 1 1】「自由の国」と「必然性の国」

「自由の国は、事実、窮迫と外的な目的への適合性によって規定される労働が存在しなくなることで、はじめて始まる。したがってそれは、当然に、本来の物質的生産の領域の彼岸にある。未開人が、自分の諸欲求を満たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないように、文明人もそうしなければならない。しかも、すべての社会諸形態において、ありうべきすべての生産諸様式のもとで、彼〔人〕は、そうした格闘をしなければならない。彼の発達とともに、諸欲求が拡大するため、自然的必然性のこの国が拡大する。しかし同時に、この諸欲求を満たす生産諸力も拡大する。この領域における自由は、ただ、社会化された人間、結合した生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝によって——盲目的な支配力としてのそれによって——支配されるのではなく、この自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくこと、すなわち、最小の力の支出で、みずから人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件のもとでこの物質代謝を行なうこと、この点にだけありうる。しかしそれでも、これはまだ依然として必然性の国である。この国の彼岸において、それ自体が目的であるとされる人間の力の発達が、真の自由の国が——といっても、それはただ、自己の基礎としての右の必然性の国の上にもみ開花しうるのであるが——始まる。労働日の短縮が根本条件である。」

（『資本論』新書版⑬1434～1435 ページ、上製版Ⅲ b 1440～1441 ページ）

【資料 1 2】『資本論』第 1 部の目次

第 1 部 資本の生産過程

第 1 篇 商品と貨幣

第 1 章 商品

第 2 章 交換過程

第 3 章 貨幣または商品流通

第 2 篇 貨幣の資本への転化

第 4 章 貨幣の資本への転化

第 3 篇 絶対的剰余価値の生産

第 5 章 労働過程と価値増殖過程

第 6 章 不変資本と可変資本

第 7 章 剰余価値率

第 8 章 労働日

第 9 章 剰余価値の率と総量

第 4 篇 相対的剰余価値の生産

第 10 章 相対的剰余価値の概念

第 11 章 協業

第 12 章 分業とマニファクチュア

第 13 章 機械と大工業

第 5 篇 絶対的および相対的剰余価値の生産

第 14 章 絶対的および相対的剰余価値

第 15 章 労働力の価格と剰余価値の大きさの変動

第 16 章 剰余価値率を表わす種々の定式

第 6 篇 労賃

第 17 章 労働力の価値または価格の労賃への転化

第 18 章 時間賃銀

第 19 章 出来高賃銀

第 20 章 労賃の国民的相違

第 7 篇 資本の蓄積過程

第 21 章 単純再生産

第 22 章 剰余価値の資本への転化

第 23 章 資本主義的蓄積の一般的法則

第 24 章 いわゆる本源的蓄積

第 25 章 近代的植民理論

【資料 1 3】労働の二重性の発見について

「僕の本のなかの最良の点は次の二点だ。(1) (これには事実のいっさいの理解がもついている) 第一章ですぐに強調されているような、使用価値で表わされるか交換価値で表わされるかに従っての労働の二重性、(2) 剰余価値を利潤や利子や地代などというその特殊な諸形態から独立に取り扱っているということ。ことに第2巻〔現行の第2部・第3部のこと——引用者注〕ではこれが明らかになるだろう。これらの特殊な諸形態をいつでも一般的な形態と混同している古典派経済学におけるこれらの取り扱い、ごった煮のようなものだ。」

(1867年8月24日付、マルクスからエンゲルスへの手紙、『全集』第31巻273ページ)

「おかしいのは、彼〔デューリング〕がこの本〔『資本論』〕の3つの根本的に新しい要素を感じ取っていないことだ。それは次の3つだ。(1) 以前のすべての経済学が、地代や利潤や利子という固定的な形態をもっている剰余価値の特殊な諸断片を、はじめから、与えられたものとして取り扱っているのとは反対に、僕は、まず第1に、これらすべてのものがまだ分解しないでいわば溶液状態で存在しているところの、剰余価値の一般的な形態を取り扱っているということ。

(2) 商品が使用価値と交換価値の二重物だとすれば、商品に表わされる労働も二重の性格をもっていなければならない、という簡単なことを経済学者たちは例外なく見落としていたのだが、他方、スミスやリカードウなどにおけるような単なる労働への単なる分解は至るところで不可解なものにぶつからざるをえない、ということ。これこそは、じつに、批判的な見解の秘密の全部なのだ。

(3) はじめて労賃が、その背後に隠れている関係の非合理的な現象形態として示され、このことが労賃の2つの形態である時間賃金と出来高賃金とによって精確に示される、ということ。」

(1868年1月8日付、マルクスからエンゲルスへの手紙、『全集』第32巻10～11ページ)

【資料 1 4】価値法則についてのクーゲルマンへの手紙

「この不幸な男には、私の本のなかには『価値』に関する章が1つもないとしても、私が与えている現実の諸関係の分析は現実の価値関係の論証と実証を含んでいるはずだ、ということが分からないのです。……どの国民も、もし1年とは言わず数週間でも労働をやめれば、死んでしまうであろう、ということは子供でもわかることです。また、いろいろな欲望量に対応する諸生産物の量が社会的総労働のいろいろな量的に規定された量を必要とするということも、やはり子供でもわかることです。このような、一定の割合での社会的労働の分割の必要は、けっして社会的生産の特定の形態によって廃棄されうるものではなくて、ただその現象様式を変えうるだけだ、ということは自明です。自然法則はけっして廃棄されうるものではありません。歴史的に違ういろいろな状態のもとで変化するものは、ただ、かの諸法則が貫かれる形態だけです。そして、社会的労働の関連が個人的労働生産物の私的交換として実現される社会状態のもとでこのような一定の割合での労働の分割が実現される形態、これがまさにこれらの生産物の交換価値なのです。

科学とは、まさに、どのようにして価値法則が貫かれるか、を説明することなのです。……ブルジョア社会の核心は、まさに、アприオリに〔その本性上〕生産の意識的な社会的な規制が行なわれない、ということにあるのです。理性的なものや自然必然的なものは、ただ、盲目的に作用する平均として実現されるだけです。」

(1868年7月11日付、マルクスからクーゲルマンへの手紙、『全集』第32巻454ページ)

【資料 1 5】複雑労働の単純労働への還元

「より複雑な労働は、何乗かされた、あるいはむしろ何倍かされた単純労働としてのみ通用し、そのために、より小さい分量の複雑労働がより大きい分量の単純労働に等しいことになる。この還元が絶えず行なわれていることは、経験が示している。ある商品はもっとも複雑な労働の生産物であるかもしれないが、その価値は、その商品を単純労働の生産物に等置するものであり、したがって、それ自身、一定分量の単純労働を表わすにすぎない。さまざまな種類の労働がその度量単位である単純労働に還元されるさまざまな比率は、生産者たちの背後で一つの社会的過程によって確定され、したがって生産者たちにとっては慣習によって与えられるかのように見える。」

(『資本論』新書版①75～76ページ、上製版I a 76ページ)

【資料 1 6】商品の“命がけの飛躍”（第三章「貨幣または商品流通」から）

商品の交換過程 W （商品）— G （貨幣）— W （商品）について

「 W — G 。商品の第一の変態または販売。商品価値が商品のからだから金のからだに飛び移ることは、私が別のところで名づけたように、商品の“命がけの飛躍”である。この飛躍に失敗すれば、なるほど商品は打撃を受けないかもしれないが、商品所有者は確かに打撃を受ける。」

（『資本論』新書版①180～181 ページ、上製版 I a 179 ページ）

【資料 1 7】恐慌の可能性

「流通は生産物交換の時間的、場所的、個人的制限をうちやぶるが、それはまさに、生産物交換の場合に存在する、自分の労働生産物の譲渡と他人の労働生産物の入手との直接的同一性が、流通によって販売と購買との対立に分裂させられることによってである。自立して互いに相対している諸過程が1つの内的な統一をなしているということは、とりもなおさず、これらの過程の内的な統一が外的な諸対立において運動するということを意味する。互いに補い合っているために内的に非自立的であるものの外的な自立化が、一定の点まで進むと、統一が強力的に自己を貫徹する——恐慌によって。商品に内在的な対立、すなわち使用価値と価値との対立、私的労働が同時に直接に社会的労働として現われなければならないという対立、特殊的具体的労働が同時にただ抽象的一般労働としてのみ通用するという対立、物の人格化と人格の物化との対立——これらの内在的矛盾は、商品変態上の諸対立においてその発展した運動諸形態を受け取る。だから、これらの形態は、恐慌の可能性を、とはいえただまったく可能性のみを、含んでいる。この可能性の現実性への発展は、単純な商品流通の立場からはまだまったく実存しない諸関係の全範囲を必要とする。」（『資本論』新書版①193 ページ、上製版 I a 192 ページ）

【資料 1 8】資本家は人格化された資本にすぎない

「資本家としては、彼〔資本家——引用者〕はただ人格化された資本にすぎない。彼の魂は資本の魂である。ところが、資本は唯一の生活本能を、すなわち自己を増殖し、剰余価値を創造し、その不変部分である生産諸手段で、できるかぎり大きな量の剰余価値を吸収しようとする本能をもっている。」

（『資本論』新書版②395 ページ、上製版 I a 396 ページ）

【資料 1 9】資本主義経済の推進力

「資本主義的生産過程を推進する動機とそれを規定する目的とは、できるだけ大きな資本の自己増殖、すなわちできるだけ大きな剰余価値の生産、したがって資本家による労働力のできるだけ大きな搾取である。」

（『資本論』新書版③576 ページ、上製版 I b 574 ページ）

【資料 2 0】生産の無制限的拡大への衝動

「資本家は、人格化された資本である限りにおいてのみ、1つの歴史的価値をもち、また、……歴史的な存在権をもつ。その限りでのみ、彼自身の過渡的な必然性が、資本主義的生産様式の過渡的な必然性のうちに含まれる。しかし、その限りではまた、使用価値と享受ではなく、交換価値とその増殖とが、彼の推進的動機である。価値増殖の狂信者として、彼は容赦なく人類を強制して、生産のために生産させ、それゆえ社会的生産諸力を発展させ、そしてまた各個人の完全で自由な発展を基本原理とする、より高度な社会形態の唯一の現実的土台となりうる物質的生産諸条件を創造させる。……資本主義的生産の発展は、一つの産業的企業に投下される資本が絶えず増大することを必然化し、そして競争は個々の資本家にたいして、資本主義的生産様式の内在的諸法則を外的な強制法則として押しつける。競争は資本家を強制して、彼の資本を維持するためには絶えず資本を拡大させるのであるが、彼は累進的蓄積によってのみそれを拡大することができる。」

（『資本論』新書版④1015～1016 ページ、上製版 I b 1012 ページ）

【資料 2 1】剰余価値生産の二つの方法

「労働日の延長によって生産される剰余価値を、私は絶対的剰余価値と名づける。これにたいして、剰余価値が、必要労働時間の短縮およびそれに対応する労働日の両構成部分の大きさの割合における変化から生じる場合、これ

を、私は相対的剰余価値と名づける。」（『資本論』新書版③550 ページ、上製版 I b 548 ページ）

(1) 絶対的剰余価値の生産——労働時間を延長する

a—————b—————c (延長前) 必要労働6時間、剰余労働6時間、搾取率100%
a—————b—————c' (延長後) 必要労働6時間、剰余労働8時間、搾取率133%

(2) 相対的剰余価値の生産——必要労働時間を短縮する

a—————b—————c (短縮前) 必要労働6時間、剰余労働6時間、搾取率100%
a—————b'—————c (短縮後) 必要労働4時間、剰余労働8時間、搾取率200%

【資料22】 労賃は資本主義的搾取の本質を覆い隠す現象形態

「『労働の価値』という表現においては、価値概念が完全に消し去られているだけでなく、その反対物に変えられている。この表現は、例えば土地の価格と同じように、1つの想像上の表現である。とはいえ、これらの想像上の表現は、生産諸関係そのものから発生する。それらは、本質的諸関係の現象形態を表わすカテゴリーである。現象においては物がしばしばさかさまに見えるということは、経済学以外のすべての科学ではかなり知られている」（『資本論』新書版④919 ページ、上製版 I b 915 ページ）

「労働日の支払部分すなわち6時間の労働を表わしている3シリングの価値が、6不払時間を含む12時間の総労働日の価値または価格として現われる。したがって、労賃の形態は、必要労働と剰余労働とへの、支払労働と不払労働とへの労働日の分割のあらゆる痕跡を消してしまう。すべての労働が支払労働として現われる。夫役労働では、自分自身のための夫役者の労働と領主のための彼の強制労働とは、空間的にも、時間的にも、はっきり完的に区別される。奴隷労働では、労働日のうち、奴隷が自分自身の生活手段の価値を補填するにすぎない部分、したがって、彼が実際に自分自身のために労働する部分さえも、彼の主人のための労働として現われる。彼のすべての労働が不払労働として現われる。その反対に、賃労働では、剰余労働または不払労働さえも支払労働として現われる。奴隷の場合には所有関係が、奴隷の自分自身のための労働を隠蔽し、賃労働の場合には貨幣関係が、賃労働者の無償労働を隠蔽する。」（『資本論』新書版④923 ページ、上製版 I b 919 ページ）

【資料23】 「富の蓄積と貧困の蓄積」

「資本主義制度の内部では、労働の社会的生産力を高めるいっさいの方法は、個々の労働者の犠牲として行なわれるのであり、生産を発展させるいっさいの手段は、生産者の支配と搾取との手段に転化し、労働者を部分人間へと不具化させ、彼を機械の付属物へとおとしめ、彼の労働苦によって労働の内容を破壊し、科学が自立的力能として労働過程に合体される程度に応じて、労働過程の精神的力能を労働者から疎外するのであり、またこれらの方法・手段は、彼の労働条件をねじゆがめ、労働過程ではきわめて卑劣で憎むべき〔資本の——引用者注〕専制支配のもとに彼を服従させ、彼の生活時間を労働時間に転化させ、彼の妻子を資本のジャガノートの車輪のもとに投げ入れる。しかし、剰余価値の生産のいっさいの方法は、同時に蓄積の方法であり、その逆に、蓄積のどの拡大も、右の方法の発展の手段となる。それゆえ資本が蓄積されるにつれて、労働者の報酬がどうであろうと——高かろうと低かろうと——労働者の状態は悪化せざるをえないということになる。最後に、相対的過剰人口または産業予備軍を蓄積の範囲と活力とに絶えず均衡させる法則は、ヘファイストスの楔がプロメテウスを岩に縛りつけたよりもいっそう固く、労働者を資本家に縛りつける。この法則は、資本の蓄積に照応する貧困の蓄積を条件づける。したがって、一方の極における富の蓄積は、同時に、その対極における、すなわち自分自身の生産物を資本として生産する階級〔労働者階級のこと——引用者注〕の側における、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、野蛮化、および道徳的墮落の蓄積である。」（『資本論』新書版④1108 ページ、上製版 I b 1103～1104 ページ）

【資料2 4】『資本論』各部の執筆と刊行の経過

	第1部	第2部	第3部
1863	草稿執筆開始（8月）		
1864	草稿執筆完了（夏）		草稿前半執筆（夏以後）
1865		前半第1草稿 第3草稿（～67年）	後半執筆（夏～年末）
1866	仕上げ稿の作業		
1867	第1部刊行（9月）	第4草稿（～69年）	
1868		第2草稿（～70年）	
1872	第2版（7月。分冊～73年） フランス語版（9月、分冊～75年）		
1877		第5草稿 第6草稿（～78年）	
1878		第7草稿	
1880		第8草稿（～81年）	
1881	第3版準備開始（11月）		
——マルクス死去——			
1883	第3版刊行（エンゲルス）		
1885		第2部刊行（エンゲルス）	
1887	英語版刊行（1月。エンゲルス）		
1890	第4版刊行（12月。エンゲルス）		
1894			第3部刊行（12月。エンゲルス）

（不破哲三「21世紀・『資本論』のすすめ」『前衛』2005年2月号、51ページ）

【資料2 5】第2部諸草稿の執筆順序

	ページ数	執筆時期	草稿の内容
第1草稿	151	1865年前半	第1篇・第1章～第3章
第3草稿	73	1865～67年	第1篇
第4草稿	61	1867～69年	第1篇、第2篇の最初の数章
第2草稿	221	1868～70年	第1篇、第2篇、第3篇
〔以下・新稿〕			
第5草稿	55	1877年4月～10月	第1篇のはじめの4章
第6草稿	17	1877年10月～78年2月	第1篇・第1章の大部分
第7草稿	7	1878年7月以後	第1篇・第1章
第8草稿	70	1880～81年	第3篇

（『「資本論」全三部を読む』第4冊、34ページ）

【資料2 6】 エンゲルスは第2部諸草稿をどう利用したか

篇・章	エンゲルスが利用した草稿
[第1篇] 第1章	第2・第5・第6・第7草稿
第2・第3・第4章	第5草稿
第5・第6章	第4草稿 (ごく一部に第2・第8草稿)
[第2篇] 第7章	第4草稿
第8章	第2・第4草稿
第9～第17章	第2草稿
[第3篇] 第18章	第2草稿
第19・第20章	第2・第8草稿
第21章	第8草稿

(同前、36ページ)

【資料2 7】 第2部の最初のプランと現行の構成との比較

第2部の最初のプラン	現行『資本論』第2部の篇・章
第一章 資本の流通	第一篇 資本の諸変態とそれらの循環
1 資本の諸変態。貨幣資本、生産資本、商品資本	第一章 貨幣資本の循環
	第二章 生産資本の循環
	第三章 商品資本の循環
	第四章 循環過程の三つの図式
	第五章 通流時間
	第六章 流通費
2 生産時間と流通時間	
3 流通費	
第二章 資本の回転	第二篇 資本の回転
1 回転の概念	第七章 回転時間と回転数
2 固定資本と流動資本。回転循環	第八章 固定資本と流動資本
	第九章 前貸資本の総回転。回転循環
	第一〇章 固定資本と流動資本とにかんする諸学説。重農主義者たちとアダム・スミス
	第一一章 固定資本と流動資本とにかんする諸学説。リカードウ。
3 回転時間が生産物形成および価値形成ならびに剰余価値の生産に及ぼす影響	第一二章 労働期間
	第一三章 生産時間
	第一四章 通流時間
	第一五章 資本前貸しの大きさにおよぼす回転時間の影響
	第一六章 可変資本の回転
	第一七章 剰余価値の流通
第三章 流通と再生産	第三篇 社会的総資本の再生産と流通
1 流通（再生産）の実体的諸条件	第一八章 緒論
2 再生産の弾力性	第一九章 対象についての従来の諸叙述
3 蓄積、あるいは拡大された規模での再生産	第二〇章 単純再生産
	第二一章 蓄積と拡大再生産

<p>4 再生産過程の、並行、上向的進行での連続、循環</p> <p>5 必要労働と剰余労働</p> <p>6 再生産過程の攪乱</p> <p>7 第三部への移行</p> <p>(『資本の流通過程』大月書店、1982年、8、199、294ページ)</p>	
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--

(『「資本論」全三部を読む』第4冊、50～52ページ)

【資料28】単純再生産表式

○ポイントは、2部門分割と生産物価値の3つの構成部分。

I	生産諸手段	—	4000c	+	1000v	+	1000m	=	6000
II	消費諸手段	—	2000c	+	500v	+	500m	=	3000

※cは不変資本、vは可変資本、mは剰余価値を表わす。

【第1の支点】

部門IIの労働者の労賃vと資本家の剰余価値mは消費諸手段の購入にあてられるが、消費諸手段は、部門IIの資本家の手中にあり、II(vとm)の形で現物で存在している。だから、部門IIのvとmは、部門IIの内部の交換で補填される。

【第2の支点】

部門Iのcは、生産諸手段の購入にあてられる部分で、その生産諸手段は、同じ部門Iの資本家の手中に現物で存在するから、部門Iの内部での交換で解決される。つまり、Icは部門内部での自己補填。

【第3の支点】

残るのは、部門Iのvとmと、部門IIのc。部門Iのvとcはどちらも消費諸手段の購入にあてられるが、その現物は部門IIの資本家の手中に、第1の交換の後に残るIIcとして存在する。他方で、部門IIの資本家は、部門IIの再生産のためにIIcだけの生産諸手段を手に入れなければならないが、それは部門Iの資本家のもとにI(v+m)として存在する。つまり、I(v+m)とIIcとの交換。

つまり、 $I(v+m) = IIc$ が単純再生産の均衡条件。

(『「資本論」全三部を読む』第五冊、81～86ページ参照。ここでは説明の順序を入れ替えた)

【資料29】拡大再生産表式——マルクスの4回の挑戦

第1回目の挑戦——『資本論』新書版⑦803～815ページ、上製版II808～821ページ

「拡大再生産の分析を剰余価値の資本化をめぐる資本の分類と結びつけたことが、問題を複雑にし、簡単に解決しにくい迷路へとマルクスをみちびいた」(『「資本論」全三部を読む』第5冊、131ページ)

第2回目の挑戦——『資本論』新書版⑦815～819ページ、上製版II821～825ページ

ここで、はじめて再生産表式が出てくる。「単純再生産の表式から出発し、そこに蓄積の条件をつけ加えて、部門Iと部門IIの交換関係を修正してゆけば、拡大再生産の表式に到達できるという、いわば“手直し”方式」をとったが、その方法ゆえに失敗(『「資本論」全三部を読む』第5冊、132～134ページ)。

第3回目の挑戦——『資本論』新書版⑦819～826ページ、上製版II825～832ページ

“手直し”方式と手を切って、出発点の表式は、拡大再生産の必要条件になかったものに。しかし、部門Iの蓄積率と部門IIの蓄積率をたがいに独立したものとして設定(実は、一方の部門の蓄積率をある数値に設定すると、もう一つの部門の蓄積率はおのずと決まる)したため、「出口のない袋小路」におちいってしまう。(『「資本論」全三部を読む』第5冊、135～)

第4回目の挑戦——『資本論』新書版⑦827～850 ページ、上製版Ⅱ833～857 ページ

「1 第一例」という見出しから後の文章。ついに拡大再生産の表式の設定に成功。しかし、マルクスは計算ミスや数字を書き誤ったりして、いろいろ混乱をする。現行版は、エンゲルスがそれを整理して、ミスを正し、数字的にも筋の通るものにしたもの。ただし、「マルクスの勘違いを誤りにまで“発展”させる書き換え」をやったところ（『資本論』新書版⑦831 ページ、上製版Ⅱ837 ページ）もある。（『「資本論」全三部を読む』第5冊、139～146 ページ。エンゲルスの書き換への誤りについては、143 ページの注を参照のこと）

※エンゲルスは、3回の失敗を含むマルクスの4回の挑戦を同じ平面で本文にまとめてしまった。

【資料30】恐慌の「運動論」的な解明

「『運動論』というのは、マルクスが使っている言葉ではなくて、恐慌理論のこの領域を表わす言葉として、私〔不破氏——引用者〕が使いはじめたものです。……

しかし、『〔恐慌の〕可能性』とは“起こりうる”ということであって、『可能性』の存在を指摘したからといって、それで恐慌を説明したことにはなりません。市場経済のなかで、購買と販売の不一致が生まれうるとしても、小さな不一致がすぐ恐慌を引き起こすというものではありません。その不一致が、どうして恐慌に爆発するところまで深刻化するのか、その過程と必然性を説明できてこそ、恐慌問題の理解を一步深めた、ということができるはずです。こういう領域の問題を、恐慌の『運動論』と呼ぶことにしたのです。」（『「資本論」全三部を読む』第4冊、102～103 ページ）

「『恐慌の可能性』で指摘された販売と購買の分裂、そこでの需要と供給の不一致は、どうか。これが、価値と価格の関係で起きるような揺れだとすると、その揺れは、恐慌のような矛盾の爆発にはなりえません。逸脱したりもどつたりの繰り返しではなく、逸脱の上に逸脱がかさなって、揺れがどんどん大きくなってゆく累進型の運動が起きないと、供給と需要とのあいだの不一致・矛盾も、恐慌の原因とはなりえないのです。しかし、商品流通の関係では、需給の矛盾はなかなか累進型の揺れには発展しません。

ところが、マルクスが発見した『流過程の短縮』は、まさに累進型の揺れを引き起こす運動形態でした。商品流通に商人や銀行が介入することによって、現実の需要の存在が証明されなくても、需要があるような見かけが生まれ、商品が販売される。そしてその見かけの需要を根拠に、また生産するわけです。こうして、販売が『現実の需要』から独立し、『架空のW—G—W』が現実のW—G—Wにとってかわる過程が累進的に進む、ということになります。これこそまさに、『恐慌の可能性』が、矛盾の累進的拡大によって、現実の恐慌に発展する過程を説明できる運動形態でした。」（同前、104～105 ページ）

【資料31】第3部の主題はなにか

「第一部では、それ自体として取り上げられた資本主義的生産過程が直接的生産過程として提示する諸現象が研究され、そのさい、直接的生産過程とは無縁な諸事情の副次的影響はすべてまだ度外視された。しかし、この直接的生産過程が資本の生涯の全部をなすわけではない。それは、現実の世界では流過程によって補足され、そしてこの流過程が第二部の研究対象であった。そこ〔第二部〕では、とくに第三篇で、流過程を社会的再生産過程の媒介として考察したさいに、資本主義的生産過程は、全体として考察すれば生産過程と流過程との統一であることが明らかにされた。この第三部で問題となるのは、この統一について一般的反省を行なうことではありえない。肝要なのは、むしろ、全体として考察された資本の運動過程から生じてくる具体的諸形態をみつけだして叙述することである。諸資本は、その現実的運動においては、具体的諸形態——この諸形態にとっては直接的生産過程における資本の姿態も、流過程における資本の姿態も、特殊な契機としてのみ現われるような、そのような具体的諸形態で相対し合う。したがって、われわれがこの第三部で展開するような資本の諸姿容は、それらが社会の表面で、さまざまな資本の相互の行動である競争のなかに、また生産当事者たち自身の日常の意識のなかに現われる形態に、一步一步、近づく。」（『資本論』新書版⑧45～46 ページ、上製版Ⅲ a 45～46 ページ）

【資料3 2】 第3部での研究の順序

<p>第1の部分</p> <p>第一篇 剰余価値の利潤への転化、および剰余価値率の利潤率への転化</p> <p>第二篇 利潤の平均利潤への転化</p> <p>第三篇 利潤率の傾向的低下の法則</p>	<p>「利潤」についての研究。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「利潤」とはなにか。その観念はどこから何を根拠にして生まれるか。剰余価値が「利潤」という形でとらえられたときに生じる新しい問題。剰余価値のとらえ方と名称が変わるだけで、実体的・量的には同じ（剰余価値＝利潤）。 ・資本家どうしの競争を通じて、利潤率が平均化される。それにともなって市場価格の基準は価値から「生産価格」に移る。 ・平均利潤率は資本主義の発展とともに次第に低下してゆく性質を持つ。この傾向が生まれる根拠はどこにあるか。それは、資本主義の運命にどんな意味を持つか。
<p>第2の部分</p> <p>第四篇 商品資本および貨幣資本の商品取引資本および貨幣取引資本への（商人資本への）転化</p> <p>第五篇 利子と企業者利得とへの利潤の分裂。利子生み資本</p> <p>第六篇 超過利潤の地代への転化</p>	<p>剰余価値が分裂してゆく諸形態の研究。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・商業資本が登場。剰余価値の一部が商業利潤として商業資本のもとに分かれていく。 ・銀行資本（利子生み資本）が登場。利潤の一部が利子として分かれていく。その結果、利潤は、利子と企業者利得とに分裂。その結果、搾取関係が隠されてしまう。資本は自動的に利子を生むという観念が一般化する（「資本関係の外面化」）。 <p>※第五篇の後半（「信用論」）。現行版ではいちばん難解なところ。</p> <p>資本主義における土地所有の問題。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地代の二つの形態（差額地代、絶対地代）。第四七章（「資本主義的地代の創生記」）では、資本主義以前の社会での地代の形態が解明される（労働地代、生産物地代、貨幣地代）。
<p>第3の部分</p> <p>第七篇 諸収入とその源泉</p>	<p>『資本論』三部全体のしめくくりにあたる部分。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・未来社会論、競争、分配関係と生産関係との関係、階級論など。

【資料3 3】「信用論」（第五篇後半）部分のマルクスの草稿とエンゲルス編集の各章との対応関係

マルクスの草稿	エンゲルス編集の章別
<p>〔第1部分〕草稿317～318ページ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・商業信用と銀行信用の基礎的な仕組みを解説した短い文章に、補助的な説明材料として、10項目のかなり長文の注が付けられている。 	<p>ここから、「第25章 信用と架空資本」を編集。</p>
<p>〔第2部分〕草稿319～325bページ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経済学者ギルバートの著作や議会報告の抜き書きが中心。後半には「貨幣資本の蓄積とそれが利子率におよぼす影響」という小見出しがつけられ、議会報告書を引用しながら、要所要所に、マルクスのかなり長い論評が書き込まれている。 	<p>前半は「第25章」に組み込む。 後半から「第26章 貨幣資本の蓄積。それが利子率に及ぼす影響」を編集。</p>
<p>〔第3部分〕草稿326～328ページ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『資本論』のこれまでの部分で、信用制度がどのように論じられてきたかを、包括的にふり返ると同時に、今後の研究の方向づけをおこなっている。 	<p>ここから「第27章 資本主義的生産における信用の役割」を編集。</p>
<p>〔第4部分〕草稿328～352、353～360ページ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな角度から、信用問題の理論的探究をおこなっている。草稿は、Ⅰ）、Ⅱ）、Ⅲ）の番号で三つに区分されている。 	<p>Ⅰ）から「第28章 流通手段と資本。トゥックとフラートンの見解」を、Ⅱ）から「第29章 銀行資本の諸構成部分」を、Ⅲ）から第30～32章の「貨幣資本と現実資本 Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」を、それぞれ編集。</p>
<p>〔第5部分〕草稿352aページ～352jページ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・〔第4部分〕のⅢ）を執筆している途中で、それに挟み込むようにして書かれた「混乱」と題する議会報告書の抜き書き。10ページほど書いた後、Ⅲ）の本文に戻っている。 	<p>〔第5部分〕〔第6部分〕から、「第33章 信用制度化の流通手段」、「第34章 “通貨主義”と1844年のイギリス銀行立法」、「第35章 貴金属と為替相場」の3つの章を編集。</p>
<p>〔第6部分〕草稿360～392ページ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Ⅲ）を書き終えた後、一本の線で区切って、書き始められた部分。全体として、議会報告書からの抜き書きが主体で、それに経済学者の著作からの抜粋や輸出入統計の書き写しなどがくわわっている。後半部分では、地金の流出入問題を中心に、まとまった理論的考察を書き始めた論稿もある。 	

（『「資本論」全三部を読む』第6冊、187～189ページ参照）

【資料3 4】マルクスの草稿の書き方

- （ア）『資本論』の本文を書くときには、横線で用紙を上下2つに分け、上段に本文を、下段に注や後からの書き加えを書く。
- （イ）資料の抜き書きや断片的な論評など、準備材料的なものは、横線を引かず用紙いっぱい文章を書き込む。
- 〔第1部分〕〔第3部分〕〔第4部分〕——（ア）の書き方
- 〔第2部分〕〔第5部分〕〔第6部分〕——（イ）の書き方。ただし、〔第6部分〕の後半（金地金の流出入への理論的考察部分）は、本文用の草稿として書かれている。

【資料35】 マルクスは『資本論』より後に書く本のための抜き書きをしていた

「僕は、肝臓の苦痛はアレン〔マルクスがかかっていた医師の名前——引用注〕が除いてくれたが、相変わらず病気だ。ところが、こんどは一種のインフルエンザにかかって、これは5～6日でなおると彼は約束してくれたが、精神活動にかんするかぎりでは、これは、じっさい、なによりもいちばん厄介なものだ。……

病気中は僕はほんの少ししか執筆できず、それも時折しかできない。その間にはどうでもいいことをやっている。……

銀行制度等にかんする1857年および1858年の議会報告書、これを僕は最近もう一度調べてみなければならなかったが、これのなかに見いだされるまったくのナンセンスは、君にもとうてい想像のできないものだ。重金主義では資本はすなわち金なのだ。その間にA・スミスへの恥知らずな回想や、貨幣市場のたわごとを彼の『啓蒙された』見解と調和させようとする恐ろしい試みがはいってくる。なかでも一頭地を抜いているのは、今やついにあらゆる肉体のたどるべき道をたどったマカロックだ。こいつは明らかにオーヴァストン卿から多額の心づけをもらっていたのだ。だからこそ、オーヴァストンは『疑いもなく最大の銀行家』でもあり、なににつけてもとにかく弁護されなければならないというわけなのだ。このごった煮の全部にたいする批判を僕はもっとあとの本のなかではじめて与えることができるだろう」（1865年8月19日付、マルクスからエンゲルスへの手紙、『全集』第31巻、121～124ページ、下線は引用者）

【資料36】 「信用論」の部分の“不破さん流”の読み方

第25章 信用と架空資本

※エンゲルスが編集した現行版の本文には、マルクスが草稿の注として書いた部分が組み込まれてしまっている。『「資本論」全三部を読む』第6冊、199～205ページで、マルクスの草稿の原型が復元されている。

第27章 資本主義的生産における信用の役割

※（1）『資本論』のこれまでの部分で信用問題をどこでどれだけ考察してきたかを包括的にふり返った部分（『資本論』新書版⑩754～764ページ、上製版Ⅲ a 754～764ページ）と（2）信用論の今後の研究方向についての問題提起の部分（『資本論』新書版⑩764～766ページ、上製版Ⅲ a 764～766ページ）とを区別して読むこと（『「資本論」全三部を読む』第6冊、222ページ参照）。

第28章 流通手段と資本。トゥックとフラートンの見解

※当時、信用問題の最大の権威とされていたトゥックやフラートンの見解を批判した章。「この章はその性格をつかんでもらえば、あまり熱心に読まないで先へ進んでもよい部分」（『「資本論」全三部を読む』、228ページ）

第29章 銀行資本の諸構成部分

※大事な点は、利子生み資本が形成されたことの必然的な結果として、「一定の規則的な貨幣収入がすべて資本の利子として現われる」（『資本論』新書版⑩802～803ページ、上製版Ⅲ b 805ページ）現象について考察した部分。

第30章～第32章 貨幣資本と現実資本 I II III

※第30章～第32章は「エンゲルスの区分にとらわれなくて、1つの統一した論稿として読むことが適切だ」（『「資本論」全三部を読む』第6冊、232ページ）。マルクスの考察の「3つの大きな流れ」をつかみ、マルクスが信用論をどこまで展開したか読み取ること（同前、235～251ページ）。詳しくは、『マルクスと「資本論」』②205～272ページ参照。

以 上